

# いつも一緒 富山のペットたち

犬や猫、あるいはウサギなどに比べると、フェレットの飼育頭数はまだ少ないといえます。病院でも犬や猫を飼う年配の方から、「あの長くてよろよろしたものは何ですか」とよく聞かれます。

フェレットは、ネズミの駆除や毛皮を目的に、イタチ科の仲間を家畜化したものが始まりで、数千年の歴史があるとされています。イタチ科の野生のもので日本にいるのは、オコジョやテン、イヌナ、アナグマなどです。意外なところでは、北海道に生息するラッコもイタチ科の仲間です。イタチ科はたいがい好奇心が旺盛で、フェレットも例外ではありません。そこが飼育の面白さなのかもしれません。

飼育の方法や魅力は、書き始めたらきりがありませんし、最近では書籍もかなり出ていますので、そちらに任せます。今回はフェレットによく見られる二つの病気、腫瘍と感染症について簡単に話しさせていただきます。

**発生確率は50%**  
腫瘍の発生頻度は、犬や猫より

池原動物病院院長  
(富山市経堂)

池原 光輝

## フェレットの病気



体をくっつけて眠るフェレット。普段から体調の変化に気を付けよう

# 腫瘍や感染症に注意

りも高いようです。特にフェレットの三大腫瘍といわれる「副腎の腫瘍」「膀胱の腫瘍(インスリンノーマ)」「リンパ腫」の発生頻度は高く、5〜6歳ごろに単独、あるいは併発して起こる確率は50%くらいともいわれています。

副腎は、腎臓の前方にある小指の先ほどの小さな臓器で、体のホルモンバランスを整える重要な働きをしています。腫瘍ができると、飲む水の量と尿が多くなる。尾から徐々に脱毛する。頸部がかゆくなる。雌は陰部が

腫れる。雄は前立腺の肥大で排尿障害が起こるなど、特徴的な症状が見られます。  
インスリンノーマは、ふらふらしてよだれを垂らす、体が力が入らないといった症状が現れます。重度の場合はけいれん発作

が起ります。これは、腫瘍化した膀胱が大量のインスリンを分泌し、低血糖を招くためです。リンパ腫で一番多いのは、胸腺型リンパ腫です。胸の中のリンパが腫れるため、肺を圧迫したり、胸水がたまったりして呼吸困難に陥りやすくなります。次に多いのが皮膚型で、難治性の皮膚病を繰り返します。

次は感染症についてです。代表的なのはジステンパー、フィラリア、インフルエンザなどです。ジステンパーは、犬と同様のウイルスによって引き起こされます。犬は呼吸器症状が中心ですが、フェレットは潰瘍を伴った重度の皮膚病が主な症状で、最終的には神経症状を伴いながら死に至ります。

フィラリアも犬と同様、蚊によって媒介され、心臓に糸状の寄生虫が付着する病気です。フェレットの心臓は小さいため、犬のように何十匹も寄生するとはありません。寄生してもせ